

杏林

KYORIN DAIGAKU SHIMBUN

大学新聞

- 1～3面 杏林学園第6次中期計画
「多彩な人材が集う人間性にあふれた大学を目指して」
杏林型ウェルネスツーリズム／地域医療体験プログラム／
高大連携／国家試験対策・日本語サポートルーム
- 4面 付属杉並病院 次世代型スマートウォッチ外来
医学部ウェルネスセンター
- 5面 トピックス
- 6面 リレーエッセイ(6) 知識より「文脈」を考える 総合政策学部講師 伊勢一也
健康ひとくちメモ(33) 食中毒の原因 付属杉並病院栄養部副部長 佐々木裕子
杏林スポーツ短信



「多彩な人材が集う 人間性にあふれた大学を目指して」

杏林学園第6次中期5カ年計画（2025～2029年度）ビジョン

杏林学園は、今年度から2029年度までの5カ年にわたる第6次中期計画を策定しました。この計画では、標記のビジョンを掲げ、教育・学生受入・学生支援・研究・社会連携・医療・経営の7つの柱を立てて重点的な取り組みを設定しています。本学は創立以来、人のために尽くすことのできる人材の育成を教育理念としてきました。中期計画はそうした本学の一貫した教育・研究の基本精神をさらに発展させるものとなっています。今号の特集では中期計画に込められた「ありたい大学」の姿を形づくる、特色ある教育・研究・社会貢献の現状とその可能性に目を向けます。



「重点取組」に見る大学の「ありたい姿」

今回の中期計画の「重点取組」に、「人への優しさ、温かさに基づく医療・教育を通じて、杏林のブランドイメージの確立を目指す」という一文があります。

これに関連して、渡邊卓学長は「先進的なデジタル技術の積極的な利活用が社会の大きな流れとなる中、本学の教育や医療における“人間性”の重要性について今一度思いを新たにしてほしい」と述べています。これらの言葉に表れているように、本学は、ITの急速な進化に伴って人間社会が大きく変容する時代に、むしろそういう時代だからこそ、人間同士の心の触れ合いを大切にする学園を実現しようと訴えています。

このほか、計画では、総合大学の利点を活かした横断的・学際的な教育研究環境の整備、入学生を含めた学生の個性を尊重した学習支援や進路指導、地域の活性化に結び付ける体制の強化などが謳われています。

こうした取り組みは本学が継続して行ってきた活動をさらに充実強化させるもので、これまでに積み重ねてきた教育・研究・社会貢献の蓄積が今回の中期計画に反映されています。

本学がどのような活動を通じて杏林らしさを育んでいるのか、それをどのように「ありたい姿」に発展させていくのか、いくつかの事例を次頁～3頁でご紹介します。

杏林学園 第6次中期5カ年計画（2025～2029年度）7つの重点取組

1 教育

- 1 学生の多様性を尊重し、個々の個性を最大限に引き出すことで、目まぐるしく変化する社会で活躍できる人材を育成する。
- 2 アセスメント・プランに基づき教育効果を測定し、その結果を教育活動の改善に反映させることで、自律的かつ継続的な教育の質保証を実施する。
- 3 医療保健学系と人文社会科学系の特色を活かした領域横断的なプログラムの提供により、杏林ならではのユニークな見識を備えた人材を育てる。

2 学生受入

- 1 多様な入試制度を効果的に活用し、高い潜在力を持つ個性豊かな学生を受け入れる。
- 2 円滑かつ信頼性の高い入学者選抜を実施する。

3 学生支援

- 1 教職員との接触機会を最大化することで、学生へ学修・生活面できめ細かい指導の充実を図る。
- 2 学生一人ひとりの適性に応じたキャリアの追求を強力に後押しする体制を構築する。

4 研究

- 1 社会に貢献することのできる先端的な研究シーズの創出を支援する。
- 2 若手研究者育成のための支援体制を整備する。
- 3 学部の枠を越えた学際的な研究環境を構築する。

5 社会連携

- 1 医療の提供を含む大学の資源を、地域活性化に結びつける体制を強化する。
- 2 共通の大方針に基づいた自治体との協力関係を構築し、地域連携の一層の深化を図る。

6 医療

- 1 地域社会に根ざした、あたたかく良質な医療を継続して提供できる体制を整備する。
- 2 先進的な技術の導入を進め、医療の革新と質の向上を図る。

7 経営

- 1 人への優しさ、温かさに基づく医療・教育を通じて、杏林のブランドイメージの確立を目指す。
- 2 ダイバーシティを尊重しつつ、優秀な人材の確保に努めるとともに人材の育成に向けた戦略を推進する。
- 3 継続的な事業活動を支える堅実な財務基盤を確立する。



杏林学園 第6次中期5カ年計画「多彩な人材が集う人間性あふれた大学を目指して」

重点取組①
教育

「観光」と「健康」の融合 「杏林型ウェルネスツーリズム」のいまとこれから

杏林大学が国の事業の採択を契機に、2013 年から取り組んでいる「健康寿命延伸」をテーマにした地域貢献活動の一つ「杏林型ウェルネスツーリズム」が各地で進展中です。「杏林型ウェルネスツーリズム」は、外国語学部と保健学部の学びを活かした、観光と健康を融合した旅のスタイルの提唱とその推進です。これまで、静岡県東伊豆町、愛知県田原市、長野県などで運動・健康・栄養の要素と温泉・観光資源の要素を足し合わせた特色ある観光プランの立案に取り組んできました。中心となって活動している外国語学部観光交流文化学科の小堀貴亮教授と保健学部リハビリテーション学科理学療法学専攻の石井博之教授に話を伺いました。



小堀教授と石井教授のもと、合同で研究を行っている学生たち

今秋、東伊豆町で
「観光・健康まちづくり講座」

小堀ゼミと石井研究室の学生たちは、東伊豆町で、源泉、足湯、ジオパーク、トレッキングコース等のウェルネス資源調査や温泉街、駅前などでのバリアフリー調査を行い、

ウェルネスツーリズムに関する共同研究を行ってきました。これらを踏まえて今年9月には、東伊豆町の住民と観光業など地域経済を担う方々を対象に「観光・健康まちづくり講座」を開催します。

講座では、東伊豆町の自然環境を活かしたアクティビティや温泉資源の活用によるウェ

ルネスツーリズムのアイデアを紹介します。そして、これらを観光やまちづくりに活かす具体的な方策を参加者同士で話し合います。

講座を担当する石井教授は、「東伊豆町の資源は非常に魅力的です。子どもから高齢者まで、誰もが楽しめるこの土地ならではのウェルネスツーリズムの実現に向けて、東伊豆の皆さんと関係が深められることを楽しみにしています」と話します。

長野では
「温泉×ワイン」企画進行中

長野県とは、小堀教授が主体となり、県の観光機構と温泉やワインなどの特産品を活かしたツーリズムの計画も進んでいます。そのための打ち合わせは、主にオンラインで行っていますが、6月12日には、長野県観光機構の担当者と国内外で活躍するワインソムリエを井の頭キャンパスに迎えて意見交換と特別講義を行いました。ワインツーリズム

について、小堀教授は「長野は温泉もワインも有名です。観光機構やワイン農家など多くの関係者と複数回にわたる意見交換を経て、今秋、学生とともに現地を訪れます。学生のアイデアと現地の特色を活かしたツーリズムに期待してほしいと思います」と話します。

可能性秘めた
「杏林型ウェルネスツーリズム」

観光と健康を融合させた旅の形「杏林型ウェルネスツーリズム」は、その地域の活性化に貢献できることが期待されます。また、障がいや介護の有無、年齢などを問わず、多くの人が楽しみ、健康増進や幸福感を得られる魅力的な観光プログラムになる可能性も秘めています。

今後は、スポーツ、マインドフルネス、リラクゼーション、食文化や食材、文化活動など温泉以外のリソースも活用した複合型ウェルネスツーリズムの提案も構想中です。

重点取組①
教育

全人的な医療を学ぶ「地域医療体験プログラム」医療の質を高める多職種連携

杏林大学が、2022年度から福島県いわき市で行っている「地域医療体験プログラム」は、専攻が異なる医学生と看護学生がチームとなって包括的な患者ケアや医療における多職種連携を実践的に学ぶ取り組みです。災害に見舞われた地域住民との交流を通して真に求められる医療・ケアを問い直す貴重な機会にもなっていて、カリキュラム以外の自由参加プログラムとして行われています。



特別養護老人ホームで入所者と交流する医学生と看護学生

多職種連携を学ぶ
ユニークなプログラム

高齢化を迎えた日本では、特に地域の高齢者の生活を包括的に支える「地域包括ケアシステム」の構築が急がれています。高齢者の多くは複数の病気をもち、医療による治療だけでなく、日常生活の支援や介護など幅広いニーズを抱えているからです。こうした複合的な課題に対して、医師、看護師、薬

剤師、理学療法士、作業療法士、社会福祉士、介護福祉士などが連携・協働することで、質の高い包括的なケアが可能となります。

本学では医学と看護学を学ぶ学生が実際に地域を訪れ、地域特有の医療課題や多職種間の連携を学ぶ「地域医療体験プログラム」を行っています。多職種連携の重要性が高まる中、こうした専門の異なる学生による合同プログラムを地域で行う大学は国内ではまだ限られています。

地域が求める医療やケアを
住民との交流を通して考える

プログラムは、福島県いわき市の社団医療法人養生会かしま病院が主催する「いとちツアー※」に参加する形で実施しています。

※いとちツアー：医療の「い」と地域の「ち」を繋ぐことを目的としたプロジェクト。医療と地域の担い手が協働する取り組み

学生たちは、かしま病院が行う訪問診療や健康支援活動に参加して、医療と地域社会のつながりを実践的に学ぶほか、住民との交流を通して生活や習慣を把握し、真に求められている医療やケアが何なのかを考えます。これらを医学生と看護学生が一緒に体験することで、お互いの専門性への理解を深め、将来の連携・協働に向けた土台を築くことができます。

プログラムを通して、学生が多職種と連携・協働しながら患者をケアする実践的な経験を積み、地域住民の健康と生活の質の向上に貢献する人材となることが期待されます。

■ 学生の成長感じる
プログラム

保健学部看護学科看護養護教育学専攻
講師 古川 美和

昨年に続き今年もプログラムに同行します。学生たちは地域から様々なことを学んでいます。地元の人の案内で津波被害を受けた地域を訪れた看護学生は「自然の脅威にさらされながらも人々が先祖を守り続ける姿に、『人に寄り添う』という看護の原点を再認識した」と話していました。また、訪問診療に同行した医学生は、医師が患者や家族の想いを丁寧に聞く姿に心を動かされたように「医療は病気だけを診るのではなく、『誰と、どのように生きているか』を受けとめる行為と感じた」と話していました。

さらに、医学生は看護学生の観察力や感情に寄り添う力に学び、看護学生は医学生の論理的な思考や病態理解に触れる機会になりました。互いに刺激を受け、専門性を尊重し合いながら協働する姿が印象的でした。

杏林学園 第6次中期5ヵ年計画「多彩な人材が集う人間性あふれた大学を目指して」

重点取組2
学生受入

高大連携の協定校が14校に 相互の教育が活性化

杏林大学は現在14の高等学校と「高大連携事業に関する協定」を締結しています。この協定は連携を深めることで双方の教育資源を最大限に活用し、より質の高い教育を実現するだけでなく、高校教育と大学教育の相互活性化を目指しています。

大学進学への意欲を高める

杏林大学では、協定を結んだ高校と連携し、生徒の皆さんの大学進学への意欲を高めるための様々な取り組みを行っています。本学の教員が高校に赴いて特別授業や講演を担当したり、協定校と本学の教職員が高大連携に関する共通のテーマで研修や意見交換会を開催したり、高校生の皆さんに大学での学びの面白さを伝える工夫や活動を行っています。

「キャンパスデー」で大学生活を体験

國學院大學久我山中学高等学校(杉並区)、藤村女子高等学校(武蔵野市)、昭和第一学園高等学校(立川市)、啓明学園中学校高等学校(昭島市)との間では、「キャンパスデー」という独自のプログラムも実施しています。

それぞれの高校の生徒が本学を訪問し、

丸一日かけて大学生活を体験します。高校生は本学の学生と机を並べて授業を受けたり、学生食堂を利用したりすることで、大学での専門的な学びや大学生活の雰囲気を肌で感じることができます。

これにより、大学での学びをより具体的にイメージし、入学後のミスマッチを防ぎ、充実した大学生活を送るための良い機会となることを目指しています。

今年5月13日には、藤村女子高等学校の2年生116人が参加してキャンパスデーが行われました。生徒は事前に希望した保健学部、総合政策学部、外国語学部の授業や実習を受けるなどしました。

高大連携がもたらす効果

高大連携は、高校と大学双方に大きな効果をもたらしています。

高校にとっては生徒が大学の専門的な学びや研究に触れることで、自身の興味や関心、将来の目標を具体的に考えるきっかけに

なり、将来の進路をより明確に意識し、早期から準備を始めることができます。

大学にとっては高校教育の現状を把握することで、大学の教育内容やカリキュラムをより効果的に改善し、発展させるためのヒン

トを得ることができます。

本学は、これからも高校との連携を積極的に推進し、高校生の皆さんの学びを支援するとともに、相互の教育の活性化を目指します。



リハビリテーション学科の授業で脳卒中患者の支援について学ぶ藤村女子高等学校の生徒

■ 藤村女子高等学校 進路指導 河野秀人教諭の談話

「杏林大学のキャンパスデーで本校の生徒たちは90分授業や昼休憩など大学さながらの生活を体験し、専門的な講義や主体的活動を通して学問への理解を深めています。高校との違いを実感することで、生徒たちは進路をより具体的に考えるようになりました。」

重点取組3
学生支援

一人ひとりにあわせた支援で学生を後押し 学生に寄り添い、学習・生活をサポート

杏林大学は学生一人ひとりに合わせた充実した支援体制を整えています。例えば、医学部と保健学部では、学生に寄り添いながら国家試験合格まで伴走する親身な指導を行っています。また、留学生向けに、所属学部を問わず利用できる日本語サポートルームを設置。日本での生活をサポートするとともに、在学生との交流の場としても活用されています。ここでは、この2つの取り組みについてご紹介します。

医療系学部生の国家試験対策

医療人として活躍する夢を叶えるには国家試験への合格が第一歩。全員が笑顔で卒業できるよう、手厚いサポート体制を整えています。

医学部の取り組み

医学部では、定期試験などに国家試験の傾向を反映させていて、学生からは「杏林の過去問をやれば必ず受かる」といった声も聞かれます。成績が伸び悩む学生には、集中講義や夏季合宿を行ったり、担任と学生支援室の教員がペアで個別に学習・進路・メンタル面の包括的な支援をしたりします。また、医師国家試験予備校の模試や講座の費用も大学や杏会(保護者会)、同窓会などが補助し、経済的なサポートもしています。毎年、学生の意見を取り入れながら試験対策制度を改善し、合格率97%前後を安定して維持しています。

保健学部の取り組み

保健学部では、「わからない用語は必ず調

べる」という学習法が定着しています。

2年連続で看護師・保健師・助産師の合格率100%を達成している看護学科看護学専攻では、実習での学びを最重視。実習で対象者の看護に必要な学習をしっかり行うことの重要性を伝え、実践と机上の学習を統合することで、記憶への定着を図ります。また学科全体の国家試験対策と合わせて、各研究室の担任が学生の学習面・生活面・メンタル面をきめ細かく支援しています。

リハビリテーション学科作業療法学専攻では、低学年から繰り返し学習方法を指導するほか、学習意欲の向上や知識の共有を目的に、グループ学習を取り入れています。これにより各自の学力に応じた学習効果が得られ、全体として学力の底上げにもなっています。4年時は週2回の集中グループ学習、ペアワークを行うほか、年末年始も朝昼2回スマホにドリルを配信し、すぐに回答させることで、生活リズムが崩れないような工夫もしています。様々な方向から国家試験合格を後押しし、2024年度は合格率100%を達成しました。

留学生のための日本語サポートルーム



杏林大学には、学部や大学院に69人の外国人留学生在籍しています。こうした留学生が自律的に日本語を学習できるよう、2025年4月に日本語サポートルームが井の頭キャンパスに開設されました。

日本語サポートルームは水曜日と木曜日に開かれ、非常勤講師の野田佳恵先生と川村幸先生、学生チューターが留学生の日本語学習を支援しています。

それぞれの希望に沿った支援

支援内容は、文章のチェック、メールの書き方、大学院の試験に向けた作文対策から留守番電話の聞き取りやアクセントの練習、日本語の短編小説を音読して内容を話し合

うなど様々です。「先生に質問する」「学生支援課に問い合わせる」「アルバイトの面接に行く」など実際に困っていることを、ロールプレイで学んだりもします。

交流の“きっかけ”として

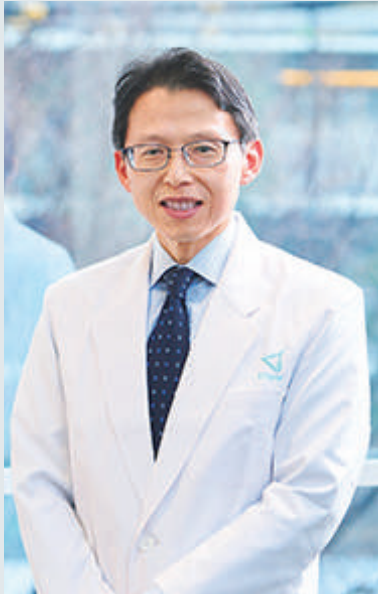
野田先生は、「留学生から、日本人学生と話す“きっかけ”がないという声をよく聞く」と言います。先生は、「日本語サポートルームは、留学生と日本人学生の交流の機会を提供する場にもなっています。学生の皆さんは、まずはクラスに留学生がいたら話しかけてください。学食や売店などキャンパス各所での“きっかけ”を通して、交流が深まれば、双方にとって様々な気づきが得られると思っています」と話しています。



次世代型「スマートウォッチ外来」本格始動 (2025年7月) デジタルの力で健康寿命を延ばす

最近、スマートウォッチ外来を開設する病院が増えてきています。ふだん身につけているApple Watch※をはじめとするスマートウォッチやスマートフォンから得られる健康データを診療や健康管理に活用するものです。今年の7月から杉並病院で本格始動するスマートウォッチ外来は、高血圧・糖尿病・高コレステロール血症などの生活習慣病から、心房細動・心不全などの循環器疾患までを含みます。さらに電子カルテシステムを活用することにより、地域医療機関との連携をより強化していく新たな取り組みとなります。

※Apple Watchは、Apple Inc.の商標です。



矢田 浩崇 (やだ ひろたか)

●医学部教授
●付属杉並病院循環器内科 診療科長
産業医科大学医学部卒、医学博士（慶應義塾大学）。
防衛医科大学校、国際医療福祉大学で不整脈治療の立ち上げなどに携わり、2024年杏林大学着任

幼少期に父を突然死で亡くしたことをきっかけに心臓病治療に携わる医師をめざし、現在に至ります。休日は趣味のテニスを楽んでいます。

なぜ「スマートウォッチ外来」なのか？

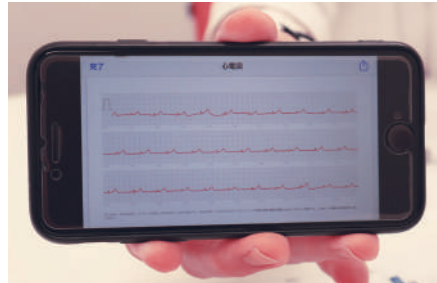
矢田教授がスマートウォッチに着目したきっかけは、コロナ禍で感じた“情報共有の難しさ”でした。「とにかく情報が不足していて、医療のデジタル化の必要性を強く感じました。海外のヘルスケアサミットに参加した際に、スマートウォッチの活用事例を知り、外来開設の構想を持ちました」。その後、札幌医科大学が企業と共同開発した電子カルテシステムを知り、これを組み合わせることで地域と共有できる次世代型「スマートウォッチ外来」にしたいと、立ち上げを決めました。

取得できるデータと対象となる疾患は？

スマートウォッチでは、歩数・歩行距離・心拍数・消費カロリーなどの日常的な活動量を自動で記録できます。さらに、血圧計・体重計・持続血糖測定器（CGM）などとBluetoothで接続することで、血圧・体重・体脂肪率・血糖値などのデータも取得・蓄積が可能で、自宅にいながら、まるで入院中のようにバイタルサインを見ることができます。こうしたデータにより、循環器疾患だけでなく、高血圧、糖尿病、肥満などの生活習慣病やサルコ



(左) スマートウォッチ本体右側にある部品（Digital Crown）に指をあて心電図を計測
(右) 心電図アプリで表示した計測データ



ペニア（筋力低下）、呼吸器疾患などの多岐に渡る疾患への対応が可能です。

杉並病院の「スマートウォッチ外来」はここが違う

これまでも患者さんがスマートフォンの画面を診察時に提示したり、紙に印刷して持参したりといった方法でデータを活用する診療は行われてきましたが、今回の外来では、セキュリティが確保されたクラウド上にデータを保存し、電子カルテから直接確認できる仕組みを導入しています。これにより、外来診療の質と効率が格段に向上します。

運動指導や生活改善指導によって血糖値やコレステロール値が改善すれば、薬の量を減らすことができ、副作用や医療費の軽減に繋がります。また、異変を感じた際に病院に

連絡してくれば、受診の緊急性を判断することができ、病気の早期診断・早期治療に直結します。さらに、患者さんのかかりつけ医と健康情報を共有することが可能で、よりきめ細かな診療や、地域医療機関との連携もスムーズに行えるようになります。

今後の展望

「当院のスマートウォッチ外来の目的は、疾患がある方だけではなく、病気の早期発見や健康意識の向上を支援するツールとして活用していくことです。今後は、患者さんが検査結果、今後の診療予約などをスマホで確認できるようにし、主体的に健康管理できる環境を整えていきたいです。未来の医療をともにつくっていく喜びや楽しさを、患者さんと医療従事者が共有できる外来にしたいと願っています。」

医学部ウェルネスセンター開設から1年 地域のメンタルヘルスと心理教育に貢献

三鷹キャンパスに杏林大学医学部ウェルネスセンターが開設されてから1年が経過しました。今後、「地域貢献」、「共同研究」、「若年層のメンタルヘルス対策」の3つを柱に活動を本格化させ、地域のメンタルヘルス対策や本学学生の教育・啓発にも役割を果たすことが期待されています。

誰もが暮らしやすい社会に

医学部ウェルネスセンターは、坪井貴嗣センター長（医学部精神神経科学教室）、脇谷順子副センター長（保健学部臨床心理学科）、公認心理師・臨床心理士の豊田彩花さんなどスタッフ9人の体制で去年の5月に医

学部講義棟Bの2階に開設。現在は週に1日と限られた頻度ですが、精神神経科の患者さんを対象に集団心理教育や集団精神療法などの介入プログラムを行っています。

現代社会において、人々は目に見えない多様なストレスにさらされています。これは大人に限ったことではありません。子どもにとって社会や生活環境の変化は、生活習慣の乱れやいじめ、不登校、児童虐待など心に関連する種々の問題として現れることがあります。これらは時として不安や不眠につながり、長期化すると成長や発達に大きな障害になることもあります。また、大人と違って心身の異変を自覚できなかったり、それを表現できなかったりして、周りから見逃されがちなことから、特に若年層の患者には早期介入と適切な治療が必要です。

ウェルネスセンターは、その活動を通して、疾患の早期発見などに対応しながら、人々の健康を推進するとともに、疾患を抱える人たちにとって暮らしやすい社会をつくり出すことを目指しています。

メンタルヘルス対策のハブとして地域に貢献

ウェルネスセンターでは、三鷹市教育委員会からの委託を受け、中学生のメンタルヘルスチェックや不調者へのカウンセリングなどを行う体制を整え、受け入れの準備を進めています。また、スタッフが学校に赴いてメンタルヘルスの講演を行うなど、若年層に向けた啓発活動にも力を入れていきます。メンタルヘルスの疾患は、統合失調症やうつ病、不安症、適応反応症、睡眠障害、摂食障害など多岐にわたり、治療には症状が深刻化する前の早期発見と対策が有効です。そうした意味から、坪井センター長は「まずは初対応できる場所として、杏林大学にウェルネスセンターがあることを地域の方、とりわけ精神神経科外来の受診はハードルが高いと感じている中高生に知ってもらいたいです。我々は三鷹市のメンタルヘルス対策のハブとして地域に貢献したいと思っています」と話しています。

積極的な共同研究と教育機能の役割も

ウェルネスセンターは、メンタルヘルスケアに関連する学内の教室や診療科との共同研究はもちろん、学外の関連施設との共同研究も積極的に行い、知見を広げています。こうした研究の成果を新しい治療法の開発などに繋げることで、人々の健康増進に貢献したいとしています。

センターは、今年度の後期から保健学部臨床心理学科の実習施設の一つになります。学生はセンターで行っている介入プログラムの見学などをします。豊田さんは、「私たち公認心理師が、医師、看護師、作業療法士、精神保健福祉士、薬剤師などと連携して患者さんをサポートする様子を学生に見てもらいたい」と話します。実習を担当する副センター長の脇谷教授は、「学生には、公認心理師の仕事や役割とともに、多職種連携や心の健康教育、地域貢献など、授業で学んだことを実習を通して、より深く学んでほしい」と期待を寄せています。



TOPICS

米国クツタウン大学生と
キャンパスで交流

5月23日から30日までの8日間、アメリカ・ペンシルベニア州にあるクツタウン大学でビジネスや社会学を専攻する学生8人が来校し、総合政策学部授業に参加するなどして在学生と交流しました。

初日は井の頭キャンパスでウェルカムパーティーが開かれ、2日目以降は教員によるミニレクチャーが行われました。「米国、中国、日本の関係」などをテーマに英語や時には日本語も交えながらディスカッションを行いました。

■ 8月下旬、
学生8人がクツタウン大学へ

8月29日から9月13日まで、今度は在学生8人がクツタウン大学などを訪れ、異文化交流やエシカルビジネスを学ぶプログラムが企画されています。昨年に続き2回目となるこのプログラムは、学生同士の交流を広げる機会にもなっています。担当の松井孝太准教授は、「交流を通じて、学生が英語を学ぶ意欲をさらに高め、英語でのコミュニケーションに自信を持てるようになることを期待しています。昨年の相互交流をきっかけに、その後も連絡を取り合っている学生もいます。今年、クツタウン大学に行く学生たちにも、こうした継続的な交友関係をぜひ築いてもらいたいです」と話しています。

「杏林大学 学部生 海外留学プログラム」開始
留学生8人が学ぶ

杏林大学新聞32号(2024年11月発行)で紹介した「杏林大学学部生海外留学プログラム」が2025年4月にスタートしました。これは海外の協定校の学生が、外国語学部または総合政策学部の3年次に転入学して2年間学び、卒業時に杏林大学と転入前から在籍する大学の2つの学位が取得できるものです。初年度の今回は、天津外国語大学、大連外国語大学、北京第二外国語学院から8人(うち1人は昨秋入学)の学生を迎えました。

■ 学外の語学学校で交流授業

留学生は授業のほか、外国語学部と総合政策学部のゼミでも在学生とともに学んでいます。

日本語教育について学ぶ外国語学部の嵐洋子教授のゼミには、天津外国語大学から許 衝(キョ ショウ)さんを迎えました。5月にはゼミが定期的に行っているアジア・アフリカ語学院(三鷹市新川)での交流授業にも参加しました。

嵐教授は、「第二言語として日本語を学んできた許さんの質問や鋭い視点はとても貴重です。後期は研究テーマの発表



劉 文博さん(左)と許 衝さん

音声解析ソフトで学ぶ
ネイティブ発音

外国語学部中国語学科3年生の授業「中国語の音声」は、1、2年生で学んだ基礎知識をもとに、より正確にイントネーションや発音を習得するため音声解析ソフトを用いた授業が行われています。

■ 正しい発音を身につけ、語学力向上を

中国語は四声と呼ばれる声調が意味を左右する言語で、「ma」の1語だけでも声の上がり下がりによって全く意味が異なります。

この授業では、中国語の音声の構造を理論的に理解することを目指し、学生は自分の発音を録音し、音声解析ソフトを使って教材CDやネイティブスピーカーとの波形や周波数を比較します。視覚的に違いを確認できるため、自分の発音の癖に気づきネイティブの発音に近づく練習ができます。学生からは「自分の発音とお手本を目で見て比較できるので、違いがわかりやすい」「とても新鮮で、楽しく発音練習ができる」などの声が聞かれます。

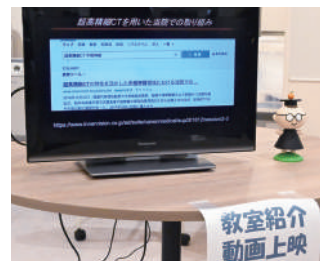
担当の藤田由香利講師は「中国語の音声は標準語でも地域によって差があるので教科書通りにはいかないこともあります。音声を比較検証することで学生に気づきを促し、中国語の発音に更に興味を持つことで知識を深めてほしいと思っています」と話しています。

医学研究を身近にした
研究交流会

5月28日、「医学研究科研究交流会」が三鷹キャンパスの医学部講義棟Aのラーニングコモンズで開催されました。イベントは医学部研究室間の研究交流を促したり、医学部の学生にもっと研究に興味を持ってもらおうと企画されたもので、4回目となる今回は、外科・内科系など20の教室・研究部門がブースを構え、各教室等が取り組んでいる研究に関するプレゼンテーションやポスター展示が行われたほか、各ブースを巡るとプレゼントがもらえるスタンプラリーなどの企画も用意されました。当日は学生など140人が参加する賑やかで活気のある交流の場となりました。

■ 学部生が研究の深さを実感

会場では、先生や院生と直接話をしながら研究について理解を深めたり、実際に研究機器にふれたり、トレーニング機材で手技を体験したりもしました。参加した学生からは「研究について直接先生に解説してもらったり、手技を体験することができてとても勉強になった」「1年生でまだ知識が少なく、分からないことが多かったですが、体験やポスター展示を通して研究の奥深さを知ることができた」などの声が聞かれました。

杏林大学管弦楽団
第40回記念 定期演奏会

杏林大学管弦楽団の定期演奏会が6月21日、めぐろパーシモンホール・大ホール(目黒区八雲)で行われ、500人を超える方々が来場しました。管弦楽団にとって第40回の記念すべき演奏会となった今回は、A.ドヴォルザーク:交響曲第9番「新世界より」、A.ボロディン:歌劇「イーゴリ公」より ダッタン人の踊り、G.ビゼー:「アルルの女」第2組曲が披露されました。

管弦楽団団長の鴨下琴音さん(医学部4年)は、「記念すべき節目の演奏会で、一層熱がこもりました。演奏が終わるごとに客席から温かい拍手と歓声をいただいたり、笑顔や感動の声を間近で感じられたりと、私たちにとっても非常に嬉しく、励みになるひとときでした。今日の感動と感謝を忘れず、これからもよりよい演奏を目指します」と話しています。

今回の定期演奏会は、2026年6月14日(日) 調布市グリーンホール・大ホールで行います。

なども始まるので、許さんがどのような発表を行うのか楽しみです」と話します。

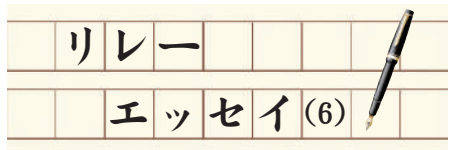
■ 旺盛な学習意欲に刺激受ける在学生

総合政策学部の松井孝太准教授のゼミには昨年の秋に天津外国語大学から転入した劉文博(リュウ ブンハク)さんが学んでいます。松井准教授は「ゼミでは英語圏のニュースメディアを題材に国際関係などの時事問題を勉強していますが、劉さんは日本語力・英語力ともに非常に高く、質疑応答などを立派にこなしていて、日本人学生の刺激になっているようです」と話します。

■ 相互に学び合う 留学生と在学生

授業やゼミで留学生と接する総合政策学部 伊勢一也講師は、「在学生にとっても、日本人同志なら当たり前とされる前提や考え方を見直す機会となっており、説明力や相互理解力の向上につながっています」と話し、在学生と留学生が相互に学び合う意義を指摘しています。

今秋にはさらに11名の留学生を大学に迎え入れることになっています。



杏林大学の先生たちに日頃の授業では取り上げない話題や知識、見聞などを自由気ままに書いていただくコーナーです。

知識より「文脈」を考える — 学び直して得た新たな視点

文系の大学教員になる一般的な道のりは大学院に進学し、20代後半で大学に就職するというものです。私の場合は少し異なり、会社員として長く働いたあと40代半ばで杏林大学に転職しました。

きっかけは社会人大学院への進学でした。仕事は順調でしたが、過去の経験に頼りすぎている自分に気づき「確かな知識」を学び直したいと思ったのです。

大学院では多くの留学生と学びました。英語よりも大変だったのは「常識」の違いです。経営判断について話し合うにも「なぜそう思うのか」という背景を丁寧に共有しないと議論がかみ合いません。同じ情報でも文化が違えば見方は全く異なるのだと知りました。

こうした経験から、企業の経営は組織の状況や社会の空気、文化といった「文脈」に強く左右されると実感しました。「どう考えるか」「なぜそう理解するか」が問われるのです。ファイナンスや統計などの知識は判断を助けてくれますが、決めるのは人間です。つまり私が求めている「確かな知識」は思っていた形



とは違っていました。知識をどう使うか、どんな場面で活かすかが大事だったのです。

大学院の後半ではこの「文脈」が学びの中心になりました。東南アジアのビジネスに関心を持っていた私は、シンガポール、タイ、ミャンマーで行われた大学のスタディツアーに参加し、個人でもベトナムを訪れました。現地の経営者の話を聞きながら、彼らが何を感じ、どう解釈し、人にどう伝えるのかを自分の五感で受け取りました。なぜなら「文脈」には嗅覚や味覚、触覚も含まれているからです。

このような「文脈」は経営に限らず、日常生活の中でも読み取ることができます。例えば、あなたのバッグに飲料が入っているとして、それはなぜそこにあるのでしょうか。コンビニで買ったのか、家族から手渡されたのか。同じ物でも、その背景には選択や行動、気配りがあります。私はこの気付きを皆さんに伝えるために、今日も教壇に立っています。



総合政策学部・講師 伊勢 一也 (いせ かずや)

横浜市立大学商学部を卒業後、米国のIT企業シスコシステムズに就職。30代で退職し、早稲田大学ビジネススクール(MBA)を修了。その後、アビームコンサルティング株式会社、株式会社クロス・マーケティングに勤務しながら、滋賀大学大学院経済学研究科、東京都立産業技術大学院大学産業技術研究科を経て、2025年に杏林大学総合政策学部に着任。専門は国際経営学および組織のデジタルトランスフォーメーション

健康ひとくちメモ ③

食中毒の原因と 発症しやすい環境



食中毒とは

食中毒は、「有害な微生物や化学物質を含む飲食物を食べた結果生じる健康障害のこと」と定義されています。多くは、急性の胃腸障害(嘔吐、腹痛、下痢などの症状)や発熱、頭痛を引き起こします。

食中毒を引き起こす主な原因は、「細菌」と「ウイルス」です。このほか毒キノコやフグなどの「自然毒」、サバやイカに寄生するアニサキスなどの「寄生虫」なども原因となります。

代表的な食中毒の原因物質と症状、発症までの目安

下表は例示であり個人差(当日の体調や年齢)や原因物質の種類や量により当てはまらない場合もあります。発症するまでの期間が長いものは特に注意が必要です。

原因物質	主な原因食品	主な症状	発症までの目安
アニサキス	鮮魚介類 (刺身、寿司)	激しい腹痛、 吐き気、嘔吐	胃アニサキス症は8時間 以内、腸アニサキス症は 数時間から十数時間以内
カンピロバクター	生や加熱不十分な鶏肉 (鶏さし、鶏たたき)	下痢、腹痛、発熱(38度以下) 倦怠感、筋肉痛	2～5日 (平均2～3日)
黄色ブドウ球菌	あらゆる食品 生や加熱不十分な二枚貝	吐き気、嘔吐、 腹痛、下痢	平均1～2日
ノロウイルス	煮込み料理 (カレー、シチュー、煮物)	腹痛、下痢	6～18時間 (平均10時間)
ウエルシ菌	あらゆる食品	吐き気、嘔吐	1～5時間(平均3時間)
腸管出血性 大腸菌	生や加熱不十分な食肉 (コック、牛さしなど)	はげしい腹痛、 血性下痢	1～14日 (多くは3～5日)

食中毒から身を守る原則

- ①つけない:食品、食器類、容器、手指などに菌やウイルスを付着させない
- ②増やさない:調理後は適切な温度で保管して菌やウイルスを増殖させない
- ③やっつける:加熱、香辛料、酢、アルコール等で除菌する

近年では一年を通じて食中毒対策が必要不可欠となってきました。食中毒は簡単な予防方法をきちんと守れば予防できます。もし、お腹が痛くなったり、下痢をしたり、気持ちが悪くなった場合は、医療機関を受診しましょう。



医学部付属杉並病院栄養部副部長

佐々木 裕子 (ささき ひろこ)

管理栄養士 女子栄養大学短期大学部卒業。立正佼成会附属佼成病院を経て、2024年より現職。栄養管理、献立作成、栄養相談など行う。病態栄養専門管理栄養士。日本糖尿病療養指導士。骨粗鬆症リエゾンマネージャー

杏林スポーツ短信

【硬式野球部】1勝の重みを痛感した春季リーグ戦



4月4日から5月19日まで開かれた令和7年度 東京新大学野球連盟春季1部リーグ。杏林大学は6勝8敗、勝ち点2でリーグ4位でした。同じ対戦相手に2勝して勝ち点1をあげるリーグ戦の序盤、杏林大学は駿河台大学(2対1)、創価大学(2対1)に粘り勝ち、勢いをつけましたが、続く共栄大学(1対2)、東京国際大学(1対2)、最終戦の流通経済大学(0対2)に敗れました。

■溝口智成監督の談話

今季のカギはリーグ折り返しの共栄大戦でした。対戦成績1対1で迎えた第3戦を勝ち切ることができず、残り2校との試合も落としてしまうなど、1勝の重みを改めて感じたリーグでした。主力選手の怪我にも苦しみましたが、控えの選手に出場の機会が巡ってきて、試合経験を積むことができました。選手層が厚くなることはよいことで、出場した選手は経験を秋リーグで活かしてほしいと思います。秋リーグまで3か月あまり。時間を無駄にせず、日々の練習をコツコツと積み重ね、粘り強さとともに技術やパワーのアップを図っていきます。

【男子バスケットボール部】運動量をアピールした関東大学選手権



4月12日から5月4日まで開かれた第74回関東大学バスケットボール選手権大会。大会には関東大学バスケットボール連盟の1部から5部の88大学が出場。3部の杏林大学は、1回戦は電気通信大学に168対41、2回戦は横浜市立大学に161対44、3回戦は関東学院大学に85対77で勝利するも、4回戦で上武大学に64対88で敗れ、ベスト32でした。

■金田伸夫監督の談話

今大会では、シード権を争う3回戦で2部の関東学院大学を破る金星を上げました。最大20点近く離されましたが、持ち前の粘りと運動量で逆転勝ちをしました。4回戦の上武大学は、2部の優勝候補だけあり序盤から劣勢でしたが、最後まで粘りと運動量で相手を苦しめました。敗れたものの、関東大学連盟からは一定の評価を受けました。秋の大会もチーム一丸で戦い、上位に進出して2部の入替戦に臨みたいと思っています。日本一と言われる運動量を誇る杏林大学ファルコンズのファンが少しずつ増えているのを感じています。見る人に感動を与えるバスケットボールをしたいと思っています。

キャンパスの日常やイベントなどを配信しています
ぜひご覧ください!



@kyorin_university



編集を
終えて

日本の観光地計画に大きな影響を与えた鈴木忠義先生は、研究室の学生に「他流試合をやらなければだめ」と語ったそうです。これは、自分の専門に閉じこもるのではなく、異なる分野の研究者と積極的に交流すべきだという意味です。大学は多様な人材が集まる場であり、まさにこの「他流試合」に最適な環境です。本学でも中期計画が進む中で、国内外の連携先から人材が集まり、分野を越えた活発な交流が生まれることを期待しています。(編集長)

「一般的に硬い内容になりがちなか中期計画」を、いかにわかりやすく読者にお伝えするかを念頭に置きながら紙面を作成しました。少子化の中で大学が置かれた環境は厳しいものがありますが、全教職員が一丸となって「第6次中期計画」に掲げられた事項を実現すれば、本学の魅力はさらに高まり、「選ばれる大学」となると確信しています。(広報室長)

杏林大学新聞 編集長 古本泰之(学生支援センター長) / 広報室
TEL.0422-44-0611 E-mail koho@ks.kyorin-u.ac.jp URL <https://www.kyorin-u.ac.jp/>

読後の感想をお聞かせください▶
今後の紙面づくりの参考にさせていただきます

